

## 中高大で英語による行動力育成をどう積み上げるか

How to Develop English Communication Capabilities from Junior High School to College

三 浦 孝  
Takashi MIURA

（平成19年10月1日受理）

These days the need for a unified syllabus for English education that encompasses all levels, from junior high school up to university, has been emphasized. Nobody would object to this ideal—we all agree that senior high school English courses should build upon the content of junior high school courses, and that college English courses should build upon that of senior high school.

In fact some attempts have been already made to create a unified syllabus. Most of them employ grammatical complexity as their organizational principle. They try to organize all the structures and morphology of English in order of complexity, and assign junior high school to teach from zero up to a certain level of complexity, and assign senior high school to start from that level up to a certain intermediate level, and expect college to take over the rest.

Although I admit that grammatical complexity can serve as one of the major elements of a unified syllabus, I wish to point out that to make a syllabus solely according to that single criterion has a serious defect. The defect is obvious when we consider the everyday fact that what we teach is not always learned by all the students. Every junior high school teacher will admit that by the end of three years of English education, some students have learned everything in the 3rd-year English textbook, but some have barely learned the content of the 1st-year textbook. This fact shows that it is meaningless to assign an upper-school to start its English courses from where the lower-school syllabus has reached—which is essentially an illusion.

As an effort to compensate for this defect, this paper proposes to include behavioral goals in a unified syllabus. By adding behavioral goals, the unified syllabus can prescribe what students should be capable of doing in English at each grade level. These behavior goals are centered on four key functions for steering student-centered interactive language learning, which are 1) basic skills for participating in all-English classes, 2) giving and responding to an English presentation, 3) solving conflicts in English, and 4) debating in English. These behaviors involve varied kinds of abilities in addition to learners' language ability, such as general social knowledge, interpersonal skills, emotional qualities, and performance skills. Therefore, it is possible for most students to make up for their weak areas with strong areas, thus enabling most students to reach the target level at the same time. Although an experimental model,

this paper proposes a unified syllabus consisting of behavioral goals in the areas of class participation, presentation, negotiation, and debating for junior high school, senior high school, and college students.

これまで中高大の英語教育連携は、常に英語力到達度を中心として議論されてきた。そしてその際の到達度には、英語検定試験の級や、文法事項の到達度が用いられてきた。前者は例えば、「中学卒業時点で英検3級合格レベル、高校卒業時点で英検2級合格レベルの力を育てて、大学へ送り出す」といった到達度目標である。後者は習得すべき文法事項を基礎から発展へと一直線に並べ（そんなことができればの話だが）「中学卒業時点で現在完了形まで、高校卒業時点で仮定法過去形までを習得して大学へ送り出す」といった到達度目標である。

しかし、筆者はこのような英語力依存の連携構想が、学力の実態を反映しておらず、現実性に欠けると考える。本稿では、このような不完全性を指摘し、英語力をむしろ行動力としての

- ①英語プレゼンテーション行動力
- ②英語ネゴシエーション行動力
- ③英語ディベート行動力

に体现した連携構想を提案する。

## 1. 「学年別英語力到達度」という無理

「中学で英検3級合格レベルの英語力を身につけて高校へ送り出す」というが、それは何パーセントの中学生を想定しているのか？教師なら誰でも知っていると思うが、教師が教えたからといって生徒が必ず学習するとはかぎらない。しかも習得には個人差があり、中3でも実際には中1の英語力レベルの生徒もいる。同様に「高校卒業時に英検2級合格程度の英語力を身につける」と言った時に、それは日本の全高校生の何%を意味するのか？筆者が推定するに、現在高3で英検2級に合格できる者は、全体の1/4に満たないのではないかと。同じく高校とはいっても、3カ年の英語履修単位数は、英語科など30単位に近い学校から、職業科の中には4単位程度のところもある。大学に至っては、学力的な輪切り傾向が強く、専門分野をオール・イン・イングリッシュで教えられる大学もあれば、半分近くの学生が中3の教科書をスラスラ音読できず、英文の主語・述語動詞も指摘できない大学もあると聞く。

このように、学年別英語力到達度のみ依存した連携構想は、「どのレベルの中学生」と、「どのレベルの高校」と、「どのレベルの大学」の連携かのあいまいさゆえに無理がある。

更に、いつになるかは不明だがもしも将来小学校に英語が教科として導入された場合には、小学校6年間で相当な学力差が生じ、もし英語力連携論に立てば、中学1年生以降は英語学力差ゆえに一斉授業は困難になるだろう。

## 2. 「英語力養成」だけなら無目的教育

英語力依拠の連携論議の第2の問題点は、「英語力」という実体のあやふやなものを目標としたために、「英語で具体的に何ができればいいのか」の行動力(performance)目標を見失ってしまうことである。例えば大学英語教育の目標として「専攻分野で自分が調査してきた事柄について、20分間英語でクラスにプレゼンテーションし、聴衆からの質問に英語で答えることができる」という行動目標を設定したならば、そのための授業プロセスや達成評価方法がはっきりと構想できる。しかもこの目標の中には、

文献を読み・論述構成を組み立て・ハンドアウトを書き・聴衆に話し・聴衆からの質問を聞き取り応答する、という主要な言語スキル全部が含まれている。更に、大学でのこのような行動目標を達成するために、高校ではプレゼンテーション行動力をどこまで高めるか、更にその基礎として中学で英語プレゼンテーション行動力をどこまで養うか、の連携議論も具体的に行うことができる。

今日まで、このような行動力目標を構想せずに来たことで、日本の英語教育は無目的となり、その空白を「受験学力」が支配してきたと言えよう。

### 3. 「英語力」という非実践的英語授業

英語力依拠の連携論議の第3の問題点は、教師が「英語力」という目標のみに目を奪われて、生徒が英語で主体的に授業を運営できるように育て上げる教育を見落としてしまうことである。

言語教育では、上級に進むにつれて、実際に目標言語を教室で駆使する learner-centered タイプの授業が効果的だとされている。そのためには、生徒自身が英語でアクティビティーを運営し、英語を作業言語としてタスク活動を行い、調べてきたことを英語でクラスに発表して質疑応答し、授業で話し合った結果を英語でレポートに書くといった、英語アクティビティー運営能力の育成を計画的に積み上げる必要がある。

EFL環境で、実践的に英語を使うに最適の場が英語授業であるはずなのに、現状ではこうした参加能力としての英語行動力育成の視点が欠落している。そのために、上級学年に進んでも授業が learner-centered になってゆかないという傾向がある。学生が英語で授業参加できなければ、大学でも日本語中心の英語授業を行わざるをえず、教室で英語を使う機会は不足する。

### 4. 学校英語教育の行動力目標の提案

以上の反省から筆者は、日本の学校英語教育の行動力目標として、次の4目標を提案する。これらの行動力があれば、日本人は国際的場面でより雄弁に発表し、交渉し、議論してゆけると考えるからである。そして、この4目標を追うことを柱とした中高大連携を提案する。

#### (1) 英語アクティビティー運営能力

英語授業で用いられる代表的コミュニケーション活動を英語で運営できる行動力である。この入門を英語学習初期（中学）に行い、それを根幹としてその上に次の3行動力の幹を伸ばしてゆく。

用いる活動は後述のように、guided composition、guided conversation、インタビュー、paraphrasing、4-hint quizzes、名刺交換会、picture description、picture differences、show and tellなどである。こうした活動への慣れを育てることによって、コミュニケーション活動のやり方の説明を省き、不慣れた活動への戸惑いを解消し、活動の指示や打ち合わせを英語で行っても理解できるようになる。要するに生徒が English speaker として授業に参加できる行動力の育成である。

#### (2) 英語プレゼンテーション行動力

図や絵を相手にわかるように説明したり、自分の記念の品についてクラスに説明することから始めて、情報や情景、出来事について英語で相手にわかりやすく客観的に伝える力。またそうした発表を聞き手としてよく理解するために、聞き返しや関連質問をする力。最終的には学会・会議・商談などにおいて、

聴衆が求める情報を、あらかじめ準備してきた研究・取材や事前調査データに基づいて、視聴覚情報・配布資料を伴って整理された一定時間の番組として、口頭発表し聴衆との間で質疑応答を行う力。

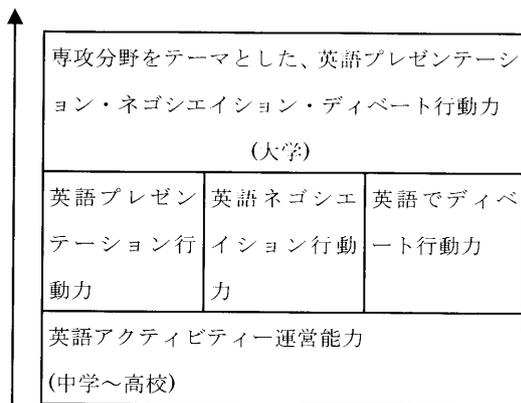
### (3) 英語ネゴシエイション行動力

対人関係調整の英語力である。他者と友好的関係を切り拓くとともに、独立した個人としての自分を主張し、また聞き手として相手の都合に耳を傾けた上でnegotiationによって協調を図る力。最終的には葛藤をも含んだ対人交渉場面において、相手方の事情・利害・主張を聞き取って理解し、こちら側の事情・利害・意見を冷静にわかりやすく相手にわからせ、自分を生かし相手も生かす合意点に達するために交渉する力。

### (4) 英語ディベート行動力

テーマについて自分の賛成・反対意見を考え、表明し、意見に根拠づけを行う力。また相手の意見の根拠を尋ねたり、相手の意見の問題点を指摘する力。その際に、mindとheartの区別に立ち、感情的にならずにより高次の考えに到達すべく双方が協力する力。最終的にはある論題について肯定側、否定側という全く異なった立場に分かれ、自分達の主張や意見を論理・根拠を伴って冷静かつわかりやすく述べ、相手側の主張・意見を聞いて深く理解した上でその欠陥や問題点を指摘して反論し、それによって聴衆に自分達の主張・意見の方が正しいことを理解させ納得させる力。

そしてこの4行動力育成を下図のように中学から大学まで積み上げるのである。



## 5. 行動力育成プロセスの例示

さて、こうした行動目標が、具体的にどのようなプロセスで育成できるかを例示してみよう。

### 5.1 英語アクティビティー参加能力の育成デザイン

表1は、英語アクティビティー運営能力の育成デザインである。汎用性のある10種類のコミュニケーション活動を取り上げ、英語を作業言語としてこれらの活動に参加できる力を養成してゆく。

表1. 英語アクティビティー参加能力の育成デザイン(各活動の詳細な説明は、三浦ほか(2006)を参照)

	活動名	活動の説明	育てる力
1	guided composition	習った英文の一部を変えて、自分のオリジナルなメッセージを作文する。提出作品を集め、名作集(あ	既習文を加工して自分を表現する。

		るいは全作品集) にして生徒に還元する。	他の生徒の作品から学ぶ。
2	guided conversation	ペアで、習った会話文の一部を変えて、オリジナルな会話を創作し暗唱、実演する。優秀な実演をみんなで鑑賞する。	既習文を加工して自分達を表現する。 他の生徒の作品から学ぶ。 クラスの前で実演する。
3	インタビュー	各自が与えられた英語質問を暗記し、クラス全員で一斉に、クラス中を歩き回って一定時間内に多くのクラスメートに質問し、どのような答があったかを事後に振り返って英語でレポートを書く。尋ねる質問は、生徒個人に考えさせてもよい。	英語の質問をきっかけにして、大勢のクラスメートに声をかけ、対話する。 あいずちなど駆使し、良い聞き手となる。 オリジナルな質問を作って尋ねる。 質問結果について英語でレポートを書く。
4	4-hint quizzes	ペアで、一方の生徒のみが黒板を見ることができ、他方は黒板が見えない位置に座る。黒板に提示された人物や物品の絵を、①animals, people, plants, places などのカテゴリーの描写→②color, size, shape の描写→③具体的な様子の描写、の順で4～5文で描写して、相手に何のことかを当てさせる。	状況や事物を相手にわかるように描写する。 相手を理解するために、聞き返し表現を駆使する。 ヒントを聞いて、何のことかを当てる。 日本語に頼らなくても互いに理解できることを実感する。
5	paraphrasing	ペアで、一方の生徒のみが、黒板を見ることができ、他方は黒板が見えない位置に座る。黒板に提示された、英語でどう言うかわからない語を、自分たちの習った範囲内の英語で易しく言い換えて、相手にわからせる。	同上
6	名刺交換会	<準備作業>各自、自分の英語名刺を作り、10枚ほどコピーしてくる。 <本番で>クラス全員で一斉に、あまり言葉を交わしたことの無いクラスメートを優先して、互いに名刺を交換し、名刺に書かれた英語を説明する。名刺に書く英語は、 初回：中央に自分の似顔絵、その左に自分の呼ばれたい呼称、名刺の左上に自分の部活動、右上に好きな食物、左下に好きな活動、右下に自分の関心事を書く。 2回目：中央に自分の似顔絵、その左に自分の呼ば	自作の英語名刺をきっかけにして、大勢のクラスメートに声をかけ、相互理解を深める。 あいずちなど駆使し、良い聞き手となる。 自発的に相手に関連質問をする。 自分自身の positive なユニークさを自覚する。他者のユニークさを知る。

		<p>れたい名前、名刺の4隅に自分が人と違うユニークな点を書く。</p> <p>&lt;事後に&gt;もらった名刺をレポート用紙に貼り、その横にその人物について1行ずつ英語で感想を書き、提出。</p>	<p>英語で感想レポートを書く。</p>
7	picture description	<p>クラス全員に、ある情景を描いた絵を見せ(いろいろに解釈できる絵)、各自が自由に想像を働かせて解釈し、その絵の中に起こっている出来事を英文で描写する。事後に英文を集め、教師が名作集にして生徒に還元する。</p>	<p>情景や道順を、相手に正確に伝える。</p> <p>他者の書いた情景描写を理解し、そこから学ぶ。</p>
8	picture differences	<p>役割Aと役割Bのペアで背中合わせに座り、絵カードAと絵カードBにある絵の相違点を、互いに英語で質問しあって見つけ出す。絵カードAと絵カードBは、一つの元絵をコピーしてその中のパーツを5箇所ほど変化させて貼って作る。絵カードにはダミーを含め、間違い候補を10箇所ほどナンバーで表示しておく、活動が容易になる。</p>	<p>絵の違いを見つけるために、互いに描写と質問と理解チェック表現を自発的に発する。</p> <p><u>英語を作業言語として用いる。</u></p>
9	picture reproduction	<p>生徒各自に、半完成の見取図(公園・学校のグラウンド・住宅・子供部屋など)と、その中に入れるパーツの絵(ブランコ・滑り台・シーソー・噴水など)を持たせる。パーツは単体ごとに切り離す。役割AとBのペアで背中合わせに座り、Aは自分が作った公園などの見取図を、英語でBに説明してゆく。Bは、Aの説明を聞いて、パーツの絵を自分の見取図に配置し、Aの絵を再現する。</p>	<p>相手に伝わるように工夫しながら絵を説明する。</p> <p>相手の説明を理解するために質問やあいずちや話者コントロールを駆使する。</p> <p><u>英語を作業言語として用いる。</u></p>
10	1枚のポスターを使った Show & Tell	<p>上記6の名刺交換会の名刺の内容で、A3サイズのポスター1枚を作り、それを提示しながらクラスの前に出て話す。</p>	<p>十分な声量で話す。</p> <p>話す際に原稿を棒読みするのではなく、原稿に頼らずに聴衆に向かって語りかける。</p> <p>聴衆の理解を確認しながら話す。</p> <p>聞き手として、聞き返しや関連質問などにより、話し手を励ます。</p>

こうしたデザインでは、次のような作業言語を生徒が駆使して、コミュニケーション活動を運営してゆくことになる：



## 5.2 英語プレゼンテーション行動力の育成デザイン

英語プレゼンテーション行動力の育成デザインでは、発表者に育成する行動力だけでなく、聴衆の聞く側の行動力をも同時に育成してゆくことが必要である。これは話し手が聴衆に一方的に演説するスピーチとちがって、プレゼンテーションでは話し手が聴衆と対話し、聴衆の理解を確認しながら話すためである。表2がその到達基準であるが、縦に配列した項目の順番は、一応基礎から発展へと積み上げているが、必ずしも固定したものではない。表2中の灰色のセルの力を中学で、白いセルを高校で養って大学に送り出すことを目安する。この到達基準を用いて、中学1年から大学まで、次のようにプレゼンテーション活動を一貫して積み上げてゆく。

中学1年：自己紹介で、1枚のポスターを見せながら2分間のプレゼンテーション。

中学2年：生徒1人ずつ世界の1国を担当して、その国について1枚のポスターを見せながら4分間のプレゼンテーション。

中学3年生：各グループで、クラス遠足プランを作成、1枚のポスターを見せながら5分間で提案、その後クラスでベストプランを投票。

高校1年～3年：教科書に登場する人物や事柄について、グループが分担して関連情報を調べ、4枚のポスターを見せながら、クラスに向けて15～20分間のプレゼンテーション。

大学生：自分の専攻分野のテーマについて調べ、パワーポイントでクラスに向けて1人15分間のプレゼンテーション。

表 2. 英語プレゼンテーション行動力の到達基準

話し手		聞き手
発表で行うこと	構想段階で工夫すること	聞き手として果たすべき役割
・原稿を見ずに話す (キーワードカード 1 枚のみ参照可)	・キーワードでブレイン・マップを描く	・発表者の問いかけ(Do you understand?)に Yes/No で応答する。
・聴衆を万遍なく見て話す	・1 枚のポスターを聴衆に見せながら話す。	・わからない時、I don't understand. と言う。
・わかるように、繰り返しながら話す	・クラスメートが知らない語は、絵や図を示し、既習語の文で言い換えて説明できるよう準備する。	・話者コントロール発言 (Please speak louder. Please repeat. Please explain. など) を使う。
・重要な語は大きく、ゆっくり発音し、2 回繰り返して話す。Today I am going to talk about ANcient CASTles in EUrope. ANcient means Old.	・聴衆の理解を助ける実物(realia)があれば用意し、見せる。 ・聴衆が知らないと思われる語は、英英的説明を vocabulary list で配布する。	・発表者の問いかけ(Please raise your hand.)に挙手で応答する。
・Do you understand?など、聞き手の理解をチェックし、Yes の返事がなければ、更に丁寧に説明する。	・Introduction-body-conclusion の流れで構想する。	・発表者の問いかけに自発的に言葉で応答する。
・聴衆に問いかけて、挙手を求める(Who likes spicy food? Please raise your hand.)	・First, Second, Third,等の discourse marker を用いて話す。	・わからない時に interrupt して説明を求める (Excuse me, but smoking cigarettes causes what?)
・聴衆に時々質問を投げかけながら話をすすめる。(What is the highest mountain in Japan?→ Mt. Fuji is.→Yes, you're right. Now, how high is it? Anybody? →3000 meters.→Good guess, but it's much taller....)	・必要ならば、理解を助けるハンドアウトを印刷して配布する。	・理解度チェック質問に自発的に回答する。
・発表の始めに理解度チェック質問を 3 問ほど出しておき、発表の最後に聴衆にそれへの回答を求め、対話形式で正解を確認する。	・あらかじめ、発表内容の理解度チェック質問を 3 問ほど作成しておく。	・聞いた話題について、発表者に関連質問を出す。Who, What, When, Where, Why, How, Do you think...?を活用するとよい。
・発表の最後に、聴衆に関連質問をするよう、働きかける。	・聴衆から関連質問が出にくいクラスでは、あらかじめ数人の友人に質問してくれるよう頼んでおく。	・発表を聞いたあとに summary を書いて提出する。

### 5.3 英語ネゴシエイション行動力の育成デザイン

次いで、(3)英語ネゴシエイション行動力（対人交渉力）の育成デザインである。ここでは、予期せぬ事態に臨機応変に英語で対処する活動を配置している。ロールプレイとはちがって、対処の方向性を教師が指示しないことが特徴である。表3のうち、活動1～7は中学、8～10は高校、11は大学と積み上げるが、オーバーラップして用いてかまわない。

表3. 英語ネゴシエイション行動力の育成デザイン(各活動の詳細な説明は、三浦ほか(2006)を参照。)

	活動名	内容
1	こんな時どうするか？	日常出会いそうな、困った場面（無理な依頼や思わぬ失敗など）や予想外の展開（人違いなど）の英文描写を読み（聞き）、それへの自分の対応を数通りの候補の中から選ぶ。
2	こんな時どう言うか？	日常ありうるような、困った場面や予想外の事態の英文描写を読み（聞き）、その際にどうやって対応するか、次の一言を創作する。
3	教科書シナリオから予想外のシナリオへ	検定教科書に出てくる会話場面をベースに、教科書のように順調に話しが進まず、意外な展開をたどった場合にどう対処するか、教科書シナリオを改作して生徒に示し、それへの対処を考えさせる。
4	自分への誤解を正す	相手から自分への誤解発言に対して、どうその誤解を正すか、次の一言を創作する。
5	もめ事 Before and After	自分が日常経験した、言葉の上での摩擦をスキットにし、クラスで演じてみる。聴衆からのフィードバックを参考にして、「どうすればもっとよく対処できたか」の観点で、スキットの改良版を作って演じる。
6	悩み相談の手紙を書こう	友達関係、勉強、部活動、性格、将来などについて、空想上の人物になって悩み相談の手紙を書いて、クラスに投げかけてみる。
7	悩み相談に回答しよう	クラスメートの書いた悩み相談数本の中から、自分が書きやすい相談を選び、それにアドバイスを書いてみる。同じ悩みに回答してきた者同士で集まり、書いてきたアドバイスを交換して交流する。
8	What do you think about this?	最近話題になっている事柄（事件、映画、本、現象）で、他の人がどう思っているのか知りたい事柄について、問いかけの手紙を書いてクラスに質問する。
9	What I think about it.	上記活動8で出された問いかけ数本の中から、自分が応えやすい問いかけを選び、それに自分の見解を書いてみる。同じ問いかけに回答してきた者同士で集まり、書いてきた見解を交換して交流する。
10	こんな時どうするか	日常出会いそうな、困った場面（無理な依頼や思わぬ失敗など）や予想外の展開（人違いなど）の英文描写を読み（聞き）、それへの対応を創作する。
11	Strategic Interaction	ある場面で（例えばデパートの売り場）、役割Aと役割Bが、それぞれ自分が置かれた状況シナリオだけを教えられ、相手の状況シナリオは教えられずに、妥協点に達するために交渉する。相手の意向をさぐり、こちらの意向を相手にわからせるように言葉で交渉し、双方満足のいく一致点を見つけ出

		<p>す。</p> <p><u>シナリオ例</u></p> <p><b>A:</b> あなたは昨日デパートの電気製品売場(electrical appliance shop)でトースターを買いました。ところが、家で使おうとしたら、壊れていてパンが焼けません。あなたは、今仕事の昼休みを利用して、そのトースターを持って、デパートの売場へ行くところです。</p> <p><b>B:</b> あなたはデパートの電気製品売場(electrical appliance shop)の店員(salesclerk)です。あなたは今はパート扱い(part-timer)ですが、正社員(full-timer)になりたいと思っています。そのために、できるだけ多くの商品を持って、客から良い評判を得たいと思っています。今、一人の客が入ってきました。腕の見せ所ですよ。</p>
--	--	--

#### 5.4 英語ディベート行動力の育成デザイン

下記の表4は、英語ディベート行動力の育成デザインである。ここでは、意見を客観的な根拠でサポートする活動、賛成・反対の両側に立って物事を見る活動、mindとheartの区別を育てる活動を配置している。同時に、ともすれば膨大な準備と時間がかかる難点のあるディベートを、より短い時間で簡便に行える工夫も施している。表4の活動のうち、中学では1～4を、高校では1～4を話題内容を大人に近づけて、大学では4（社会的テーマで）と5を積み上げる。

表4. 英語ディベート行動力の育成デザイン（各活動の詳細な説明は、三浦ほか(2006)を参照）

	活動名	内容
1	すばやく自説を正当化する根拠を述べる	“I like poor life better than rich life.” “I love cockroaches for my pet.”など、わざと常識に反する命題を与え、それに対して、すばやくその根拠を述べさせる。
2	What Is Your Excuse?	普段「いけない」とされている事を想定し、それをどうしてもやらなければならない場合を仮定し、もっともな口実を考えさせる。
3	Chain Letter	<p>命題（例：Every student should join a club activity.）について、一定時間内に座席の前の生徒から後ろへと紙を回して紙上ディベートする。命題は列の人数分用意し、全生徒がどれかの命題について同時進行で論述する。</p> <p><b>1st writer:</b> 賛成 or 反対の立場を選んで論述し、5分後にはその紙を後ろの生徒に渡す。</p> <p><b>2nd writer:</b> 1st writer に「反対」で論述し、7分後にその紙を更に後ろの生徒に渡す。</p> <p><b>3rd writer:</b> 「1st writer に賛成・2nd writer に反対」で論述し、7分後に紙を更に後ろの生徒に渡す。</p> <p><b>4th writer:</b> 「1st writer に反対・2nd writer に賛成」で論述し、</p>

		7分後に終了、紙を 1st writer に戻す。 <b>1st writer:</b> 返ってきた紙上ディベートを読み、「特に賛同する部分」「反論したい部分」に色マーカーで線を引き、感想を書いて提出。
4	Micro Debate	ある命題（例：Summer is the best season to visit Osaka.）について、3人1組で、それぞれが「賛成派」「反対派」「ジャッジ」の役割を入れ替えて3ラウンド行う。各ラウンドは下記内訳で、合計10分。 1. 「賛成派」の constructive speech: 1.5分 2. 「反対派」の rebuttal: 1分 3. 「反対派」の constructive speech: 1.5分 4. 「賛成派」の rebuttal: 1分 5. free debate: 2分 6. judging and reflection (ジャッジが、どちらの論述がより説得力があったかを判定し、理由を述べる。) 3分
5	問題投書への反論書き	「この投書はとんでもないことを言っている、ぜひ反論したい」と思うような新聞投書(The Japan Timesなどでさがす)を数点取り上げ、その中から自分が最も反論したいものを選んで、反論の投書を書く。書いたら、同じ元投書を選んで反論を書いた生徒同士が集まって、互いの投書を交換し鑑賞する。

## 6. 行動目標中心の連携構想の利点

以上試案であるが、英語力に偏した連携構想のゆがみを是正するための連携構想を提案してみた。こうした行動目標中心の連携構想の利点としては、次の点が挙げられる。

(1) 表1～4に示したように、行動目標中心の指導プロセスには、用いる授業活動が基礎から発展まで具体的に配置されている。しかも、行動目標は、各ステップが達成できたかどうかを、生徒の行動で確かめることができるため、達成度が明確に把握・記述できる。ことに小中高一貫校でこれを用いれば、非常に具体的な連携プランが立てられる。また各生徒が授業で英語話者としてどこまで行動でき、次に達成すべき課題は何なのかを、4種の到達基準に照らして記述できるため、生徒自身にとっても今後の努力点がよくわかる。

(2) クラスの生徒間にはかなりの英語力差があっても、むしろその差をプラスに活かして対応できる。その理由は、こうした活動中心の授業では、アイデアのユニークさ・背景的知識の豊かさ・音声の洗練・調査研究の深み・映像提示の巧さ・ユーモアの工夫など、多元的価値が生かされ、英語力という単一的優劣を補うからである。仮に小学校6年間の英語授業で、相当な学力差が生まれていても、こうした行動目標中心の授業でなら、生徒一人ひとりを活かす授業が可能である。これは特に小中高一貫教育校での英語力格差への対処に有効であろう。また将来公立小学校に英語が教科として導入された場合には、中学1年入学時点で既になんかの英語力格差が生じてくると予想されるが、その際にも英語力格差をこれらの行動力で補充することが期待できる。

(3) 人に発表し、人とわかり合い、人と論じ合う授業で、生徒はまず英語でコミュニケーションすることの楽しさを味わい、それが「もっと良く理解し・伝えたい」という言語formの学習動機につながる。つまり、もっとしっかり表現できるようになりたい、もっとよく理解できるようになりたい、という欲求が先に生まれ、それが文法や単語の学習の動機づけとなる。この動機の強さは、無目的で抽象的な「英語力」を追っている場合の比ではない。

## おわりに

以上、行動目標を柱とした中高大連携構想を提案してきた。このように行動的英語力を計画的に育成することによって、日本の英語授業が、生徒が英語を駆使して運営に参画するスタイルへと脱皮してゆき、その結果としてより多くの国民が世界的舞台で堂々と英語で発表し、交渉し、説得できるようになることを願う。

## 引用文献

三浦孝・中嶋洋一・池岡慎（2006）『ヒューマンな英語授業がしたい』研究社